Kanazawa University

金沢大学文学部論集　言語・文学篇
第24号　2004年　13～27


# フェーロー語の所有代名詞と所有の属格と所有関係を表わす前置詞について

入　江　浩　司

## 1．はじめに

本稿[1]の目的は、フェーロー語[2]の所有代名詞および所有を表わす名詞類の属格と、それらと平行した所有関係を表わすのに使用される前置詞について、特に身体部分と親族名称を主要部とする名詞句に議論を限定し、所有者を表す名詞類の種類に注目し、使用される形の分布を記述することである[3]。

フェーロー語では、特に話し言葉において、名詞類の属格が所有の意味で用いられることが少なくなり、それに代わってさまざまな前置詞を用いた表現が発達していることが指摘されている（Lockwood 1977: 104-106, Barnes and Weyhe 1994: 207-208を参照）。例えば、*pápi drongsins* 'father:NOM boy-the:GEN'「その少年の父」（名詞の属格）よりも、*pápin hjá dronginum* 'father-the:NOM at boy-the:DAT'「その少年の父」（前置詞 hjá）の方が現在の話し言葉では普通の表現である。

しかし一方で、名詞の属格とは異なり、代名詞の属格および所有代名詞は、現在の話し言葉でも頻繁に使用されている（Barnes and Weyhe 1994: 208）。例えば、*pápi teirra* 'father:NOM they:GEN'「彼らの父」（代名詞の属格）や *pápi mín* 'father:NOM my:NOM'「私の父」（所有代名詞）[4]は現在の話し言葉でも普通の表現である。

なお、所有代名詞は1人称単数と２人称単数（および３人称再帰）の形しか存在せず、所有表現においては形態論上、１人称単数と２人称単数（および３人称再帰）では所有代名

---

[1] 本稿は、平成15年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究 (B)、課題番号14710371、研究課題「島嶼北ゲルマン語における前置詞表現の研究」）による研究成果の一部である。現地調査に協力して頂いた Birgit Ørvarodd さんと Finn Ørvarodd さんに厚く謝意を表する。

[2] フェーロー語は、デンマーク領フェーロー諸島で話されるゲルマン系の言語であり、系統的関係はアイスランド語と最も近い。話者数は約４万人。形態論的な格は、主格と対格と与格と属格の４つ。文法性は男性・女性・中性の区別がある。名詞には、接尾辞定冠詞がついた形（「定形」と呼ぶ）と、そうでない形（「不定形」と呼ぶ）がある。定形名詞は英語のグロスで '-the' と表示する。

[3] 本稿では便宜上、「A の B」という関係を表わす表現における A を「所有者」、B を「所有物」と呼ぶ。

[4] mín は１人称単数の所有代名詞の男性単数主格。形容詞変化をする所有代名詞の形態については表１を参照のこと。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University



詞、それ以外の人称・数では当該の名詞類の属格が使用されるという相補分布になっている。所有代名詞には３人称再帰形（単複の区別なし）も存在し、文中においておそらく１人称単数・２人称単数の所有代名詞と並行的な使用分布になると思われるが、３人称再帰形については調査が十分でなく、本稿では取り上げない。また、１人称単数と２人称単数の代名詞にも属格形が存在するが、所有表現には用いられない[5]。表１に、形容詞変化をする所有代名詞の主格形を挙げておく。

**表１　１・２人称所有代名詞**

| | １人称単数 | | | ２人称単数 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 男性 | 女性 | 中性 | 男性 | 女性 | 中性 |
| 単数主格 | mín | mín | mítt | tín | tín | títt |
| 複数主格 | mínir | mínar | míni | tínir | tínar | tíni |

ここで本稿の以下の構成について簡単に述べておく。２節で先行研究を概観し、どのような表現が問題となるのかを明らかにする。３節が本稿の中心で、筆者が集めたデータを、全体と部分の関係と親族関係の表現に分けて検討する。４節が全体のまとめである。

## ２．先行研究

ここでは、属格および所有代名詞と、それらと並行的な関係を表わす前置詞に関して比較的詳しい記述を含む Lockwood（1977）と Barnes and Weyhe（1994）の二つを取り上げる。特に前者は例文が豊富であり、問題となる表現が概観できるように例を引用しておく。

### 2.1　Lockwood (1977)

まず、属格について、日常語では少数の句に聞かれるだけであるとし、次のような例が挙げられている（Lockwood 1977: 104）：

(1)　hjartans　　takk [6]
　　heart-the:GEN　thank:NOM　'sincere thanks'

---

[5]　1・2人称単数代名詞の属格、またそれ以外の名詞類の属格も同様に、属格を取り得る若干の前置詞と共に、主に固定した言い回しで用いられる。例えば *koma til mín*　'come to me:GEN'「私のところへ来る」 *koma til Føroya* 'come to Faroe:Islands:GEN'「フェーロー諸島へ来る」(Lockwood 1977: 91-92 を参照)。この属格は所有表現ではなく、本稿では取り上げない。

[6]　例の２行目のグロスは入江が加えた。引用符内の英訳は原著のもの。この節、以下同様。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University



(2) annars manns barn
another:GEN man:GEN child:NOM 'another man's child'

(3) Føroya søga
Faroe:Islands:GEN history:NOM 'Faroese history'

(4) gamla manna søgn
old:GEN men:GEN tale:NOM 'old men's tale'

これらの表現では属格の名詞が被修飾語に先行することが指摘されている。

しかし、書き言葉では属格がよく用いられ、被修飾語の前に現れることも後に現れることもあるとし、次のような例が挙げられている（ibid.: 104）:

(5) móttakarans undirskrift (undirskrift móttakarans)
recipient-the:GEN signature:NOM 'recipient's signature'

(6) Løgtingsins samtykt
Parliament-the:GEN decision:NOM 'Løgting's decision'

また、女性名詞の単数属格、およびすべての性の名詞の複数属格はあまり多くなく、通常、被修飾語の後に現れるとして、次のような例が挙げられている（ibid.: 104）:

(7) navn móðurinnar
name:NOM mother-the:GEN 'the mother's name'

(8) rørsla arbeiðaranna
movement:NOM workers-the:GEN 'the worker's movement'

こうした表現は話し言葉では前置詞を使った表現に取って代わられるとして、次のような例が挙げられている（ibid.: 104）:

(9) navnið á mammuni
name-the:NOM on mother-the:DAT 'the mother's name'

(10) rørslan hjá arbeiðarunum
movement-the:NOM at workers-the:GEN 'the workers' movement'

人名では、話し言葉でよく -sa(r) という接尾辞をつけて所有の属格が形成されるという記述がある（ibid.: 106）:

(11) Jákupsa(r) bók
Jákup:GEN book:NOM 'Jákup's book'

前置詞について述べた部分で、英語の属格は hjá (+DAT) で最もよく翻訳されるとし、次のような例が挙げられている（ibid.: 104）:

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University



(12) hugsjónirnar hjá Jógvani [7]
ideals-the:NOM at Jógvan:DAT 'John's ideals'

(13) bønirnar hjá teimum heilagu
prayers-the:NOM at that:DAT holy:pl:DAT 'the prayers of the saints'

また、この前置詞は特に代名詞と共に頻繁に用いられるとして次のような例が挙げられ、所有代名詞・代名詞の属格を用いた表現と等価であるとしている（ibid.: 105）：

(14) hesturin hjá mær (= hestur mín)
horse-the:NOM at me:DAT ( horse:NOM my:NOM) 'my horse'

(15) húsini hjá okkum (= hús okkara)
house-the:NOM at us:DAT ( house:NOM our:GEN) 'our house'

次いで前置詞 hjá 以外のさまざまな前置詞が挙げられているが、本稿で扱う全体と部分の関係と、親族関係の表現に関わるものを拾っておく。

前置詞 á 'on'（ + DAT）は身体部分に言及する場合等に使用されるとしている（ibid.: 105）：

(16) høvdið á manninum
head-the:NOM on man-the:DAT 'the man's head'

(17) føturnir á honum (= føtur hansara)
feet-the:NOM on him:DAT ( feet:NOM his:GEN) 'his feet'

(18) portrini á staðnum
gates-the:NOM on place-the:DAT 'the gates of the place'

前置詞 í 'in'（ + DAT）：

(19) limirnir í nevndini
members-the:NOM in committee-the:DAT 'the members of the committee'

前置詞 at 'towards'（ + DAT）は、人名や血縁関係を表わす語によく用いられるが、主部が年上である場合だけであると述べられている（ibid.: 105）：

(20) omma at Marjuni
grandmother:NOM towards Marjun:DAT 'Marjun's grandmother'

(21) pápi at Andrassi
father:NOM towards Andrass:DAT 'Andrew's father'

---

[7] 前置詞 hjá は、語源的には「家で」というような意味である (de Vries 1962: 229)。ちなみに、アイスランド語にも同じ前置詞があるが、全体と部分の関係を表わすのには使用されない。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University



(22) foreldrini at børnunum
parents-the:NOM towards children-the:DAT 'the children's parents'

前置詞 til 'to' ( + ACC) は、血縁関係を表わす語によく用いられるとしている (ibid.: 105) :

(23) mamma til Líggjas
mother:NOM to Líggjas:ACC 'Elijah's mother'

(24) sonur til Gamla Bónda
son:NOM to Old:ACC Farmer:ACC 'Old Farmer's son'

また、単数対格で人間関係を表わすことがよくあるという記述がある (ibid.: 103) :

(25) pápi drongin
father:NOM boy-the:ACC 'the boy's father'

(26) mamma brúðrina
mother:NOM bride-the:ACC 'the bride's mother'

(27) abbi lítla Jógvan
grandfather:NOM little:ACC Jógvan:ACC 'little John's grandfather'

(28) døtur keypmannin
daughters:NOM shop-keeper-the:ACC 'the shop-keeper's daughters'

## 2.2 Barnes and Weyhe (1994)

フェーロー語の所有表現は、話し言葉で所有の属格がほぼ消失したことと、それを復活させようとする言語純粋主義者の試みによって非常に複雑になっていると述べられている (Barnes and Weyhe 1994: 207)。話し言葉で属格が使用される場合は、主要部に先行することが多いとしている (ibid.: 207)。

人間関係を表わすには、前置詞 *at* 'at' や *til* 'to' がよく使われ (例えば *mamma til Kjartan* 'Kjartan's mother' (cf. (23, 24))、また、対格単数を主要語に後置させても表わせるが (例えば *pápi drongin* 'the boy's father' (=25))、後者はこの 40、50 年のうちに失われつつあると述べられている (ibid.: 208)。

属格が大規模に前置詞句に取り替えられたのと平行して、「名詞+所有代名詞(原著では possessive adjective)」は「名詞+ *hjá* 'at, with' + 人称代名詞」によっても表わされるが、ただし属格とは異なり、所有代名詞 (および代名詞) は現在の話し言葉でも書き言葉でも使用されており、特に所有代名詞は血縁関係を表わす語を修飾するのに用いられるとしている (ibid.: 208)。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University



## 2.3 本稿の扱う範囲

以上、先行研究を概観したが、多くの事柄が混在して、複雑な印象を与えている。さまざまな所有関係の表現に言及されているが、特に多いのは、身体部分に関する表現と、親族関係を表わす表現である。また、所有者を表わす名詞類の種類によって、使用される表現の傾向が異なることが予想されるが、先行研究の記述からは必ずしも明らかでない。本稿では、所有物の位置に身体部分（さらに、具象物の全体と部分の関係における「部分」）と親族名称が現れる表現に議論を限定し、それぞれの場合について、所有者の位置の名詞類の種類によって分類し、整理してみる。

所有代名詞および属格と、前置詞 hjá + DAT については、非常に広範に用いられているようであり、身体部分と親族名称についてもこれを検討する。

先行研究に見られるその他の表現では、身体部分については、前置詞 á + DAT （例(16), (17)）が挙げられているが、前置詞 í + DAT（cf. 例（19））も身体部分の表現に使用されるため、これも加えて検討する。また、具象物（無生物）の全体と部分の関係も合わせて考察する。親族関係については、at + DAT (例（20-22))、til + ACC (例（23, 24))、単独の対格（例（25-28））が挙げられており、本稿でもこれらの表現を検討する。

## 3．調査データの検討

この節では、筆者が 2003 年 9 月にフェーロー諸島で行なった調査で得られたデータを検討する。話者として調査に協力して頂いたのは、トシュハウン（Tórshavn）生え抜きの Birgit Ørvarodd さん（1940 年生、女性）である。

2 節で検討した先行研究では、さまざまな事柄が混在していたが、本稿では、いわゆる譲渡不可能所有（inalienable possession）の代表的なものとして諸言語の記述で言及される、全体と部分の関係［3. 1］と親族関係［3. 2］の表現に対象を絞り、所有者を表わす名詞類の種類に注目してデータを整理する。名詞類の分類は、いわゆる名詞句階層の考え方を参考にしている（角田 1991：第 4 章）[8]。

---

[8] 角田 (1991: 39) では、Silverstein らの、主にオーストラリア先住民の言語の格組織の研究に基づいて、次のような名詞句階層が提示されている：

| 代名詞 | | | 名詞 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 無生物名詞 | |
| 1 人称 | 2 人称 | 3 人称 | 親族名詞、固有名詞 | 人間名詞 | 動物名詞 | 自然の力の名詞 | 抽象名詞、地名 |

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University



### 3.1 全体と部分の関係

ここでは具象物の全体と部分の関係を表わす表現を検討する。所有者を表わす名詞類の種類を、1・2人称単数代名詞［3.1.1］、1・2人称複数および3人称(単複)代名詞［3.1.2］、人間を表わす名詞［3.1.3］、動物を表わす名詞［3.1.4］、無生物を表わす名詞［3.1.5］、の5つの類に分け、それぞれ、(ア)所有代名詞、(イ)属格、(ウ)hjá + DAT、(エ)á + DAT、(オ) í + DAT、のいずれの形が使用されるかを検討する。

所有物を表わす名詞は、所有者が所有代名詞あるいは属格で現れる場合に不定形で現れ、それ以外の場合には通常、不定形で現れる。

#### 3.1.1 1・2人称単数代名詞

所有代名詞が存在するのは、この類だけである。その一方で、この類の代名詞の属格を所有の意味で用いることはできない（脚注5を参照のこと)。所有代名詞の例：

(29) hond mín
hand:NOM my:NOM 「私の手」

(30) hjarta mítt
heart:NOM my:NOM 「私の心臓」

前置詞では hjá + DAT が使用され、話し言葉ではこれが最も普通の表現である：

(31) hondin hjá mær
hand-the:NOM at me:DAT 「私の手」

(32) hjartað hjá mær
heart-the:NOM at me:DAT 「私の心臓」

前置詞 á + DAT、と í + DAT は、所有物が所有者の表面のものと見なされるか、内部のものと見なされるかで使い分けられるものであるが（3.1.3を参照)、この類の代名詞では言えないようである[9]：

(33) *hondin á mær
hand-the:NOM on me:DAT 「(私の手)」

(34) *hjartað í mær
heart-the:NOM in me:DAT 「(私の心臓)」

---

[9] 現代アイスランド語では、所有者の名詞類の種類に関わらず、全体と部分の関係を表わすのにこれらの前置詞が頻繁に使用される。例：*höndin á mér* 'hand-the:NOM on me:DAT'「私の手」、*hjartað í mér* 'heart-the:NOM in me:DAT'「私の心臓」。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University



### 3.1.2 1・2人称複数および3人称（単複）代名詞

所有代名詞はこの類には存在しない。属格を使用することは可能である：

(35) hendur okkara
hands:NOM our:GEN 「我々の手」

(36) hond hansara
hand:NOM his:GEN 「彼の手」

前置詞では hjá + DAT が使用され、話し言葉ではこれが最も普通の表現である：

(37) hendurnar hjá okkum
hands-the:NOM at us:DAT 「我々の手」

(38) hendurnar hjá teimum
hands-the:NOM at them:DAT 「彼らの手」

前置詞 á + DAT、í + DAT は、この類では用いられないようである[10]：

(39) *hendurnar á okkum
hands-the:NOM on us:DAT 「(我々の手)」

(40) *hjartuni í okkum
hearts-the:NOM in us:DAT 「(我々の心臓)」

(41) *hárið á honum
hair-the:NOM on him:DAT 「(彼の髪)」

もし（41）のように言うと、彼の体の表面に落ちている髪のことになり、それを意図した場合には適格な表現である。

### 3.1.3 人間を表わす名詞

全般に名詞の属格が所有の意味で使用されることは少ないようであるが、名詞の属格が使用される場合は、主要部に先行することが多い（Barnes and Weyhe 1994: 207-208）。（42）は人名、（43）は人間を表わす普通名詞の例：

(42) Jógvansa hond
Jógvan:GEN hand:NOM 「ヨグヴァンの手」

(43) drongsins hond
boy-the:GEN hand:NOM 「その少年の手」

---

[10] Lockwood (1977: 105) には、*føturnir á honum* 'feet-the:NOM on him:DAT'「彼の足」(= (17)) という例が挙げられているが、筆者のコンサルタントはこの表現を使わないという。個人差があるかもしれないが、所有者が代名詞の場合に容認可能性が落ちると予想される。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University



人名と人間を表わす普通名詞とで使用される表現の傾向に特に差はないようであり、以下、人名の例を挙げる。

前置詞 hjá + DAT は使用が可能で、話し言葉ではこれが最も普通の表現である：

(44) hondin hjá Jógvani
hand-the:NOM at Jógvan:DAT 「ヨグヴァンの手」

この類では前置詞 á + DAT、í + DAT が可能であり、それぞれ身体の表面とみなされるか、内部と見なされるかで使い分けがなされる：

(45) hondin á Jógvani
hand-the:NOM on Jógvan:DAT 「ヨグヴァンの手」

(46) hjartað í Jógvani
heart-the:NOM in Jógvan:DAT 「ヨグヴァンの心臓」

ただし、前置詞 í を用いることのできる身体名称は多くないようであり、「心臓」の他に前置詞 í を用いることが現在確認できているのは innvølur「内臓」だけである。また、eyga「目」、tunga「舌」、magi「胃」といった身体名称は、á, í どちらの前置詞を使うこともできない（hjá は可能）[11]：

(47) eygað {hjá / *á /*í } Jógvani
eye-the:NOM {at / *on /*in} Jógvan:DAT 「ヨグヴァンの目」

### 3.1.4 動物を表わす名詞

属格の使用は可能である：

(48) hundsins høvd
dog-the:GEN head:NOM 「その犬の頭」

前置詞 hjá + DAT の使用も可能である：

(49) høvdið hjá hundinum
head-the:NOM at dog-the:DAT 「その犬の頭」

しかし、人間を表わす名詞類と異なり、動物を表わす名詞の場合は、á + DAT ないし í + DAT を用いた表現が最も普通である：

(50) høvdið á hundinum
head-the:NOM on dog-the:DAT 「その犬の頭」

---

[11] フェーロー語とは異なり、アイスランド語では eyga「目」、tunga「舌」、magi「胃」といった身体名称には前置詞 í を用いる。また、いかなる身体名称でも、á または í のいずれかの前置詞を用いた表現が可能である。その一方で、アイスランド語では身体部分に hjá は使用されない。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University



(51) magin í jóturdýri
stomach-the:NOM in ruminant:DAT 「反芻動物の胃」

### 3.1.5 無生物を表わす名詞

属格の使用は可能である：

(52) húsins tak
house-the:GEN roof:NOM 「その家の屋根」

生物を表わす名詞と異なり、無生物を表わす名詞の全体と部分の関係には hjá + DAT が使用できない：

(53) *takið hjá húsinum
roof-the:NOM at house-the:DAT 「(その家の屋根)」

(54) *beinini hjá borðinum
legs-the:NOM at table-the:DAT 「(そのテーブルの足)」

無生物を表わす名詞の全体と部分の関係には、á + DAT ないし、í + DAT を用いるのが最も普通である：

(55) takið á húsinum
roof-the:NOM on house-the:DAT 「その家の屋根」

(56) beinini á borðinum
legs-the:NOM on table-the:DAT 「そのテーブルの足」

(57) hurðin í húsinum
door-the:NOM in house-the:DAT 「その家のドア」

### 3.1.6 この小節のまとめ

全体と部分の関係を表わす表現について、以上で検討した諸形の使用状況をまとめると、表２のようになる。

すでに述べたように、所有代名詞と属格は、１・２人称代名詞とそれ以外で相補分布をしている。属格の使用状況については、名詞類の種類によって特に目立った違いはないようである。

使用可能な前置詞の種類については、所有者を表わす名詞類の種類と相関していることがわかる。前置詞 hjá + DAT の使用可能性については、次のような階層が考えられる：

(58) 人間 ＞ 動物 ＞ 無生物

すなわち、前置詞 hjá + DAT は人間を表わす名詞類で最も頻繁に用いられ、無生物では使用されない。動物については使用可能であるが、別の前置詞 á + DAT ないし í + DAT を使用することの方が普通である。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University



前置詞 á + DAT および í + DAT の使用については、次のような階層が考えられる：

(59)　代名詞（人間）＜ 名詞（人間）＜ 名詞（動物・無生物）

すなわち、前置詞 á + DAT および í + DAT は人間を表わす代名詞では使用されず、動物や無生物を表わす名詞について最も頻繁に用いられる。人間を表わす名詞については使用可能であるが、別の前置詞 hjá + DAT を用いることの方が普通である。

**表２　全体と部分の関係**

| | | 所有者を表わす名詞類の種類 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 代　名　詞 | | 名　　詞 | | |
| | | 1sg, 2sg | 1pl, 2pl, 3sg/pl *1 | 人　間 | 動　物 | 無生物 |
| 所有者の表示 | 所有代名詞 | ＋*2 (29, 30)*3 | なし | なし | なし | なし |
| | 属　　格 | なし*4 | ＋ (35, 36) | ＋ (42, 43) | ＋ (48) | ＋ (52) |
| | hjá + DAT | ＋＋ (31, 32) | ＋＋ (37, 38) | ＋＋ (44) | ＋ (49) | － (53, 54) |
| | á / í + DAT | － (33, 34) | － (39, 40, 41) | ＋ (45, 46, 47) | ＋＋ (50, 51) | ＋＋ (55, 56, 57) |

*1 ３人称代名詞は、人間を指す場合のみを考察の対象としている。動物や無生物を指す場合には、名詞のそれぞれの項目と同じ分布になると予想される。
*2 使用される表現を‘＋’で、使用されない表現を‘－’で示した。縦の列それぞれの中でもっとも頻繁に用いられる表現を‘＋＋’で表わした。
*3 括弧内は対応する例文番号。
*4 １・２人称単数代名詞の属格は、形態としては存在するが、所有関係の表現には使用されず（脚注５を参照）、この表では除外している。

## 3.2　親族関係

ここでは親族関係を表わす表現を検討する。所有者を表わす名詞類の種類に注目し、１・２人称単数代名詞［3.2.1］、１・２人称複数および３人称（単複）代名詞［3.2.2］、人間を表わす名詞［3.2.3］、の３つの類に分け、それぞれ、（ア）所有代名詞、（イ）属格、（ウ）hjá + DAT、（エ）at + DAT、（オ）til + ACC、（カ）対格、のいずれの形が使用されるかを検討する。なお、現在のところ、人間の親族関係しか調査ができておらず、ここでは人間の親族関係に限定する。

所有物を表わす名詞は、前置詞 hjá + DAT を用いる場合は通常、定形で現れ、それ以外の場合は通常、不定形で現れる。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University



### 3.2.1 1・2人称単数代名詞

所有代名詞が存在するのは、この類だけである。逆にこの類の代名詞の属格を所有の意味で用いることはできない（脚注5を参照のこと）。所有代名詞の例：

(60) pápi mín
father:NOM my:NOM 「私の父」

(61) sonur mín
son:NOM my:NOM 「私の息子」

この類では、所有代名詞を用いるのが最も普通の表現である。

前置詞では、hjá + DAT が使用可能である：

(62) pápin hjá mær
father-the:NOM at me:DAT 「私の父」

(63) sonurin hjá mær
son-the:NOM at me:DAT 「私の息子」

前置詞 at + DAT や til + ACC は使用できない：

(64) *pápi at mær
father:NOM towards me:DAT 「(私の父)」

(65) *pápi til meg
father:NOM to me:ACC 「(私の父)」

また、単独の対格による表現もできない：

(66) *pápi meg
father:NOM me:ACC 「(私の父)」

### 3.2.2 1・2人称複数および3人称（単複）代名詞

所有代名詞はこの類には存在しない。属格の使用は可能であり、この類の代名詞では最も普通の表現である：

(67) sonur okkara
son:NOM our:GEN 「我々の息子」

(68) pápi teirra
father:NOM their:GEN 「彼らの父」

前置詞では、hjá + DAT が使用可能である：「我々の息子」

(69) sonurin hjá okkum
son-the:NOM at us:DAT 「我々の息子」

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University



(70) pápin hjá teimum
father-the:NOM at them:DAT 「彼らの父」

前置詞 at + DAT や til + ACC は使用できない：

(71) *pápi at okkum
father:NOM towards us:DAT 「(我々の父)」

(72) *pápi til teir
father:NOM to them:ACC 「(彼らの父)」

また、単独の対格による表現もできない：

(73) *pápi okkum [12]
father:NOM us:ACC 「(我々の父)」

### 3.2.3 人間を表わす名詞

属格は可能である。(74) は人名、(75) は人間を表わす普通名詞の例：

(74) faðir Jógvansar
father:NOM Jógvan:GEN 「ヨグヴァンの父」

(75) faðir keypmansins
father:NOM merchant-the:GEN 「その商人の父」

前置詞 hjá + DAT は使用が可能で、この類ではこれが最も普通の表現である：

(76) pápin hjá Jógvani
father-the at Jógvan:DAT 「ヨグヴァンの父」

(77) sonurin hjá keypmanninum
son-the:NOM at marchant-the:GEN 「その商人の息子」

前置詞 at + DAT は、所有物（主要部）の方が所有者よりも年長の親族の場合にのみ可能なようである（cf. 2.1 (20-22)）：

(78) pápi at dronginum
father:NOM towards boy-the:DAT 「その少年の父」

(79) *døtur at keypmanninum
daughters:NOM towards merchant-the:GEN 「(その商人の娘たち)」

前置詞 til + ACC も使用が可能である：

(80) pápi til lítla Jógvan
father:NOM to little:ACC Jógvan:ACC 「小さいヨグヴァンの父」

---

[12] 1・2人称複数の代名詞は、与格と対格が同形になる。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University



(81) sonur　　til　　keympannin
son:NOM　to　　merchant-the:ACC　「その商人の息子」

この類では、単独の対格による表現も可能である：

(82) pápi　　lítla　　Jógvan
father:NOM　little:ACC　Jógvan:ACC　「小さいヨグヴァンの父」

(83) sonur　　keympannin
son:NOM　merchant-the:ACC　「その商人の息子」

### 3.2.4　この小節のまとめ

親族関係を表わす表現について、以上で検討した諸形の使用状況をまとめると、表３のようになる。

すでに述べたように、所有代名詞と属格は、１・２人称代名詞とそれ以外で相補分布になっている。代名詞と名詞で、使われる形が大きく異なる。

代名詞の場合は、所有代名詞ないし代名詞の属格を使用するのが最も普通の表現であり、前置詞は hjá + DAT のみが可能である。

名詞の場合は、前置詞 hjá + DAT を用いた表現が最も普通であるが、属格や、前置詞 at + DAT および til + ACC、さらに単独の対格による表現も可能である。

**表３　親族関係**

| | | 所有者を表わす名詞類の種類 | | |
|---|---|---|---|---|
| | | 代　名　詞 | | 名　詞 |
| | | 1sg, 2sg | 1pl, 2pl, 3sg/pl | (人間) |
| 所有者の表示 | 所有代名詞 | ++*1 (60, 61)*2 | なし | なし |
| | 属　　格 | なし*3 | ++ (67, 68) | + (74, 75) |
| | hjá + DAT | + (62, 63) | + (69, 70) | ++ (76, 77) |
| | at + DAT (所有物が年長) | − (64) | − (71) | + (78, 79) |
| | til + ACC | − (65) | − (72) | + (80, 81) |
| | 対格 | − (66) | − (73) | + (82, 83) |

*1 使用される表現を‘+’で、使用されない表現を‘−’で示した。縦の列それぞれの中でもっとも頻繁に用いられる表現を‘++’で表わした。
*2 括弧内は対応する例文番号。
*3 １・２人称代名詞の属格は、形態としては存在するが、所有関係の表現には使用されず（脚注５を参照）、この表では除外している。

NII-Electronic Library Service

Kanazawa University



## 4　おわりに

本稿では、フェーロー語の所有表現のうち、全体と部分の関係と、親族関係を表わすものについて、それぞれ所有者の名詞類の種類に注目して検討した。特に全体と部分の関係については、いわゆる名詞句階層の考え方を採用することで、使用される表現の分布傾向が理解できる。親族関係についても、代名詞と名詞とで、使用可能な表現の分布が大きく異なる。

全体と部分の関係でも親族関係でも共通して使用できる、所有代名詞・代名詞の属格と、前置詞 hjá + DAT について言えば、親族関係の表現で所有者が代名詞の場合に所有代名詞・代名詞の属格が最もよく使われ（cf. 2. 2）、親族関係の所有者が名詞（人間）の場合と、全体と部分の関係で所有者が人間を表わす代名詞・名詞の場合に前置詞 hjá + DAT が最もよく使われると言える。

### 略　号

| | | | |
|---|---|---|---|
| ACC | 対格（accusative） | sg | 単数（singular） |
| DAT | 与格（dative） | pl | 複数（plural） |
| GEN | 属格（genitive） | * | 不適格と判断される表現 |
| NOM | 主格（nominative） | | |

### 参考文献

Barnes, Michael P. and Eivind Weyhe. 1994. 'Faroese.' In: E. König and J. van der Auwera (eds.). *The Germanic Languages.* London: Routledge. pp.190-218.

Lockwood, W.B. 1977. *An Introduction to Modern Faroese* (3. printing). Tórshavn: Føroya Skúlabókagrunnur.

角田 太作. 1991.『世界の言語と日本語』. 東京：くろしお出版.

Vries, Jan de. 1962. *Altnordisches etymologisches Wörterbuch.* Leiden: Brill [4. Auflage 2000].

NII-Electronic Library Service